

## 河内賢隆先生送別

栗原万修

河内先生が定年を前に辞められるということは、かなり以前にご本人からお聞きしていました。残念なことです、いろいろ思うことがおありだったのだろうと推察いたします。河内先生とは個人的にとくに親しいということはありませんでしたが、でも二人だけでよく話す機会がありました。そしてそんなとき、たいてい「弟さんはお元気ですか」とおたずねしました。

弟さんとは、現在、城西大学のドイツ語の専任をされておられる河内信弘さんのことです。以前、本学に非常勤でご出講ねがっていらっしゃいましたので旧知の間柄です。日本文学についても造詣が深く、お辞めになった後も萩原朔太郎についての論文や中島敦の作品を独訳された本などをその都度送っていただきました。

お兄さんの河内先生とはあまり文学に関する話をしたことはありませんが、仏教やお寺の現状、駒沢大学の昔のことなどをいろいろ教えていただきました。いつもニコニコされながらゆっくり話されるのが印象的ですが、それも日頃のご円満なお人柄のあらわれなのだと思います。

ところで河内先生はいろいろな翻訳をされていますが、特記すべきは、先生が翻訳・出版された『ビルマ - タイ鉄道建設捕虜収容所』（1993年、而立書房、共訳）で〔日本翻訳文化賞〕を受賞されたことでしょうか。これは医療将校ロバーツ・ハーディ博士の実体験の日誌を訳したもので、第二次大戦中、日本軍が強行建設したタイとビルマを結ぶ鉄道建設のためにイギリス兵をはじめ連合軍の捕虜を各地の収容所から連行して、過酷な条件の下で一日16時間も働かせ、ついに1万6千人をこえる犠牲者を出したことで、戦後大きな問題となった例の事件の記録です。そしてこれもビルマ・タイ鉄道建設にかかわる記録

ですが、その後さらに先生が翻訳出版された『ウェアリー・ダンロップの戦争日記』（1997年、而立書房、分担共訳）も750頁を超える大冊で、前訳書と同じように社会的に評価された記念すべき出版であったと言ってよいでしょう。その綿密な訳文に先生の几帳面な性格がよく現れていると思います。

どうぞ大学を辞められた後も、ぜひこのような有意義な翻訳等のお仕事はつづけていってほしいと思います。そして同じく今年お辞めになった小笠原隆元先生ともども、いつまでもお元気ですごされますよう心よりお祈り申し上げます。

## 河内賢隆先生

小 玉 齊 夫

中島敦に『名人』という小品がある。この種の話は好まないと私は言いたいのだが虚心に内を省みると実は好まないと言い立てたい不遜な自分がいるだけであることに気づく。そして実際の在り様から逸れ逆の方向を自らに課す心理の実験あるいはそれを顕示した記述をこれまで少なからず呈してきたことにおのずから思い到るが、しかしそれは「ディコトミーの魔」に対する私の果敢ない反抗であったかと思われなくてもない。

『名人』はその末尾で或る境界に透入した者がおのずと表示するに到る(らしい)凡庸で見栄えのしない痴愚とも見粉う拳措・風貌を物語っている。このようなおそらくはせんな逆説あるいはおのずからなる韜晦の在り様の描出は私には親しいものであるがそれゆえにこそ一種の胡散臭さを感じてしまうのも事実である。自分だけ得心しそれを誇示するおそらく誰もが避け難い胡散臭さ(ナルシズム)はこれは敬遠するのみで比較の対象に引き寄せるまでもないが、親